

十 もう一つの実験

高度資本主義の時代は、すでに見たように、社会の構造を破壊した。資本主義に先立つ社会は種々の諸社会から組み立てられており、それは複合的多元的な構成体であった。これによってその社会は、特殊の社会的活力を与えられ、革命前の中央集権国家の全体主義的傾向に抵抗することが可能となり、その多くの要素が自治的生活をはなだしく弱められたときにもなおそうであった。結社の固有権に反対するフランス革命の政策はこの抵抗を打ちこわした。それ以後新しい高度資本主義的中央集権主義は、古い中央集権主義がなしえなかったこと、すなわち社会を原子化することに成功した。機械およびその助けをえて社会を支配する資本は個々の人間のみを相手にしようとし、また近代国家は自治的集団生活をますます横奪することによってこれを援助した。プロレタリアートが資本に対抗して建設した闘争組織、経済的組織である労働組合および政治的組織である政党は、その本質上この解体過程をはばむことはできない。なぜならば、それらは社会自体の生活およびその基礎たる生産と消費になんらの通路をもたないからである。資本の国有への転移もまたなんらの構造的更新を招来しえないし、この転移

が、眞の自治生活を欠き、またそれ自体新しい社会主義社会の細胞とはなりえないような強制的協同組合の網を確立するときにも、同様である。

このことからして、協同組合運動の客観的眞髓は、社会の構造的更新への、新しい構造学的形態における内部的関連の奪還への、新しい *consociatio consociationum* (諸組合の組合) への傾向として認められるべきである。この傾向がその初期には時おりロマンチックな回想やユートピア的な幻想と結びついていたという理由で、それをロマンチックなもしくはユートピア的なものとするのは、まさに私が説明したように、根本的に誤りである。それは根本において全く局地的でありまた建設的である。すなわちそれは与えられた条件のもとで与えられた手段をもって達成しうる改革を考へるのである。そして心理的にはそれは、たとえ多くの場合抑圧され、それどころか麻痺せしめられてはいても、人間の永遠の欲求に、すなわち人間がそこでくつろぎ、共に住む人びとが彼との出会い、彼との協働のうちに彼の固有の本質と生活を確認するところのより広大な建物のなかの一つの部屋として自己の住居を感じたいという欲求に根ざしている。共通の見解と共同の努力のみに基づく結合は、この欲求を満足せざることはできない。それは、共同の生活が築きあげる結合のみに可能である。しかし生産や消費の協同組合組織もまた、それらが人間をその生活自体の形成においてではなく、ただ一定の点でしかとらえないため、それぞれ不十分であることが立証され、また同様に、そのために部分的機能

的な性格のためにも、新しい社会の細胞となるには不適當であることが証明された。これら二つの部分的形態はいちじるしく発展したが、それは消費協同組合ではたんに全く官僚制化された形態においてであり、生産協同組合では全く専門化された形態においてである。今日それらを含む共同体的生活の度合は、従前より減っている。こうしたことについての意識から、総合的な形態すなわち完全協同組合が求められてくる。その最も有力な試みは生産と消費との結合の上に共同生活が建設される共同体村落である。そのさいわれわれは生産のもとに農作業だけでなく、さらに農業と工業および手工業との有機的結合をも理解しなければならぬ。

過去一五〇年の間に、ヨーロッパおよびアメリカで、共産主義的なものであれ、狭義の協同組合的なものであれ、この種の共同村的移住地を建設しようと企てた種々の試みは、概ね失敗した。失敗したと私がいうのは、たんに多少のちがいはあれ短命な存続のあとで全く崩壊したり、あるいは資本主義的秩序をとりいれ、それによって全く反対の陣営に移ったかかの移住地の企てだけについてのことではない。むしろ孤立するにいたったものをもそれに教えている。それというのは、新しい村落共同体の本来の構造更新的な課題はそれらの連合とともに、すなわちその内部構造を支配するものと同じ原則の下での互いの団結とともににはじまるからである。ほとんどどこでもそこまではない。カナダのドゥホポール教徒の場合のように、連合的団結が成立したところでも、連合体自身が孤立したままにとどまり、一般社会には

なんらの魅力も教育的影響もおよぼさず、したがってその課題の実現も手初め以上に出てなかつたし、社会主義的な意味での成功を語ることはできない。クロポトキンがこれら二つの契機、移住地相互の孤立と移住地の社会からの孤立のうちに、普通の意味でも失敗とされる原因を認め、めたことは注目に値する。

社会主義の課題は、新しい村落、種々の生産形態を結合し、生産と消費とを結びつける村落が、無定形化された都市社会に構造的更新の意味での影響をおよぼす程度に依じてはじめて実現されるであろう。そうした影響は、より以上の技術的発達が生産の分散化を可能にし、さらにそれを要求するときまたその限りに十分作用することができるであろう。しかし現代の協同組合的村落にもまた、都市社会に働きかけることのできる放射的な力がすでに潜んでいる。ただ建設のおよび局地的傾向が問題であることが再び強調されなければならない。都市を破壊しようとするなどのは、かつて機械を破壊しようとしたことがそうであったように、ロマンチックであり、ユートピア的であろう。しかし都市を技術の発達との密接な関連の下に有機的に組成し、小単位の集合に変えることは建設的であり局地的である。今日すでに多くの国々で重要な意味をもつその芽生えが存在するのである。

私が過去の歴史と現在とを見わたした限りでは、完全協同組合を創設しようとしたただ一つの包括的な企てに、社会主義の意味におけるある程度の成功を認めることができよう。それは

パレスチナにおけるユダヤ人の種々の形態の協同組合村である⁽¹⁶⁾。この協同組合村にもたしかに内部の関係、連合および一般社会にたいする影響という三つの領域のすべてにおいて深刻な問題がつきまとうてきた。しかしそれは、そしてそれだけが、これら三つの領域にわたって生きた存在であることを示した。協同組合的移住地の歴史において他のどこにも、一定の人びとの範囲に対応した形態の共同生活へのこのように倦むことのない探究、このようにたえず更新される試み、放棄、批判、新たな試み、同じ幹から、同じ形成衝動からのたえず新たに生ずる分枝は存在しない。また自己の問題にたいするこのような監視、問題との不断の対決、問題を検討しようとするこの強い意志、言葉で外部に表わされてはいないが問題克服のためのこのようなたえ間のない格闘は、他のどこにも存在しない。ここに、またここだけに、生成し行く自覚的な共同体器官が発生した。この器官は敏感の余りたえず絶望に陥られるけれども、それはより高い希望、すなわち絶望の土上にのみ成長し、またもはや感情ではなくしてただ働くことを意味するより高い希望をかきたてるため、感情的な希望をうちこわすところの絶望である。それ故、ごく穏当な概観と考察からしても、地球上のこの一地点で、あらゆる部分的失敗にもかかわらず、一つの失敗していない企てを認めることができるというてよいであろう。——そして現にそれは模範的な失敗していない企てとなっているのである。

その原因は何であろうか。それらの原因をあとづけることによって、この協同組合的植民事

業の特殊の性格をもっともよく知ることができるとは、その逆もまた然りである。

その一つの契機についてはくりかえし指摘されている。それは、パレスチナにおけるユダヤ人の共同体村がその成立を教説にはなく事態に、事態の必要、強制、要求に負うたことである。「クヅツア」(Kvutza)すなわち村落コミュニティの建設においては、イデオロギーではなくて仕事が先立ったといわれた。それはなるほど正しいが、それにはただ一つの制限がある。たしかにパレスチナの現実が移入民に課した特定の労働および建設の問題を、協力によって解決することが必要であった。個人個人のゆるい集合ではその本質からして与えられた条件の下では成し遂げえないこと、それどころかそうした条件の下では本質上試みえないこと、それをこの集団は敢行し、試み、成就したのである。だがいわゆるイデオロギー——私は古いけれどもすたれない理想という言葉でよぶ方を好むが——は、たんに後からつけ加えられる何か、つくりあげられた事実を根拠づける何かではない。パレスチナの最初のコミュニティを建設した人びとの精神には、時の要求に理念的な動機、折々にロシアのアルテルの記憶、いわゆるユートピア社会主義者たちの書物を読んでの印象および社会正義に関する聖書の教えのほとんど意識されていらない影響が独特にまじり合った動機が結びついていて、決定的なことは、この理念的な動機がゆるやかで柔軟な性格をほとんど例外なく保持したことである。多くの様々な将来への夢も存在した。人びとは前途に新しい包括的な家族形態を見た。人びとはみずからを労働

運動の前衛、それどころか社会主義の直接の実現者、新しい社会の原型と見た。人びとは新しい人間と新しい世界の形成を目標とした。しかしこれらのうちどれ一つとして固い出来上った綱領に硬化されはしなかった。人びとは、協同組合的移住地の歴史ではどこでもそうであったように、具体的な事情によって変更することは許されないうで、ただ記入するだけでしかないような図式を持参しなかった。理想は刺戟を与えたが、いかなるドグマをも生み出さなかった。それは鼓舞激励はしたが、命令はしなかった。

だが何よりも重要なのは労働と建設の課題を提起したパレスチナの事態の背後には一つの歴史的事情、大きな外部的危機に襲われ、大きな内部的転換をもってこれに対処した民族の歴史的事情が存在したことであり、またこの歴史的事情が、あらゆる階級のなかから「ハルツィーム」(Chaluzim)すなわち開拓者たるエリートと呼び集め、そして階級を超越させたことである。

このエリートに適した生活形態が共同体村なのであった。——このなかに私はただ一つのニエアンスだけでなく相互扶助の社会構造からコミュニティのそれにいたるすべての段階を考えている。この共同体村は、中心の「開拓者的」課題を果すのに最も適した形態であり、また同時に社会的な生活理想が民族的観念を實際に吹きこむことのできる形態であった。歴史的諸前提からしても、これらエリートと彼らのこうした生活形態にとって、静止と孤立のうちにおちいることは内面的に不可能であることが明かとなった。彼らの任務、彼らの仕事、彼らの開拓者的精神

によって彼らは魅力と影響の中心となった。「開拓者精神」(Chaluzint)はあらゆる点で新しい変革されて民族共同体の生成に関連づけられた。それは、自己満足におちいるやいなや、自らの精神を放棄したであろう。共同体村は、生成しつつある社会の中核として、この生成に献身する人々の心を強く引きつけずにはいなかった。それは、それに参加している人びとを真の共同体生活に教育するだけでなく、さらにそれをこえてその社会の周辺に建設的構造的な作用をおよぼさずにはいなかった。歴史の力学が共同体村と社会との関係の力動的性格を規定したのである。

この性格は、外部的危機のテンポがかくも急速になり、その発現の形態がかくも急進的になったため、内部の変化がそれと歩調を合せることができなくなったとき、かなり傷つけられることになった。パレスチナが「アリア」(Alia)すなわら「巡礼」の地から移人の一国になるにつれて真の開拓者精神の代りに半開拓者精神が現われてきた。共同体村の魅力は中断しなかったが、その教化力は別種の人間材料の流入にたち打ちできなくなり、時にはこの人間材料の方が共同体村の色彩を規定するようになった。またそれと同時に一般社会との関係が変化した。一般社会は、その構造を変えるにつれて、核細胞の改革的影響からだんだん遠ざかり、それどころかそのうちの中心的な分子をとらえ、同化することによって、共同体村に影響を加え、その影響は必ずしもすぐには気づかれなかったが、今日ではすでにはっきり認められるものとなった。

民衆の生活、とりわけ歴史的危機のうちに立つ民衆の生活においては、そこに真の、すなわち中心的な職能に召された、非算奪的なエリートが出現しているかどうか、次にこれらエリートが社会にたいする自己の使命を忠実に守り、社会にたいする関係の代りに自己自身にたいする関係をうち立てないかどうか、さいごに彼らがその使命にふさわしい仕方で補充され、更新されて行くことができるかどうか、こうしたことこそは決定的な意味をもつのである。さいごのことには二様の意味がある。すなわちエリートがその後自然につづく者に強く影響することができ、かくて後進者は、どんなに困難な問題であっても、エリートの仕事を適切につけて行くかどうか、またできるだけすべての適格な分子が加わり、それ以外の者はできるだけ加わらないような正しい選抜と正しい訓練とによって精神的後継者を立てるか、あるいは不適格者の参加がさげられない場合には正しい教育的な影響によって調整がなされるかどうかということである。パレスチナにおけるユダヤ人の植民の歴史的運命は開拓者のエリートを喚び起し、彼らは共同体村のうちに彼らの社会的中核形態を見出した。そして同じ歴史的運命のもう一つの波がこれらエリートのうちに、半開拓者と共に一つの問題を持ちこんだ。あるいはもっと正当には、彼らのうちに潜む問題を開展させた。これはまだ克服されていないし、彼らがその使命の途上で次の段階に達しうる前に、克服されなければならない問題である。共同体の全責任を引き受けている人びととどこかで責任を回避している人びととの間の内的緊張は、最も

奥深いところからのみ克服されることができぬ。

問題が起る点は、理念にたいする関係でもなければ社会にたいする関係でもなく、また労働にたいする関係でもない。こうした点ではどこでも、半開拓者たちもまた自制し、全力を尽くし期待されたことを大体実行した。問題が持ちあがる点、人びとが「つまずく」点は、仲間との関係である。ここで私が考えているのは、当時さかんに論議された「小さな」クヴツアの親密さや「大きな」クヴツアではこの親密さが失われることなどではない。私が考えているのは、共同体制の大きさととは全く関係のないことである。親密さが問題ではない。——親密さは、あるところにはあるし、ないところにはない。問題は開放性にある。真の共同体は、たえずいっしょに歩きまわる人びとから成ることを要しない。それは、まさに同志として互いのために心をうち開けその用意をしている人びとから成立しなければならぬ。その存在のあらゆる点において潜在的に共同体の性格をもつものが真の共同体である。かくして共同体の内部の社会的内部の問題は実際にはその純粋性、したがってまたその内的力とその持続性との問題である。パレスチナにユダヤ人の共同体村を建設した人びとはこのことを深い本能から感知していた。しかしもはや本能は、かつてと同じ程度に活潑であるようには見えない。だがわれわれはこのきわめて重要な領域についてもまた、私がすでに指摘したあの容赦なく明敏な集団的自己観察と自己批判とを見出すのである。しかしそれを正しく理解し評価するためには、人びとがかれ

らの共同体村の最も内的な固有の本質にたいしていくと比類なく積極的な、まさしく信仰的な関係といっしょにして見なければならぬ。両者は同一の精神世界の二つの側面であり、どちらも他を欠いては理解されないのである。

パレスチナにおけるユダヤ人の共同体的移住地の失敗しない原因を描き出すため、私はその成立の非教義的性格をまず述べることとした。この性格は共同体村の発展をもまた本質的に規定した。たえず新しい形態や中間的形態が全く自由に分れ、そのどれもが特殊の社会的および精神的要求の発展から生れ、成立の当初からすでに自己のイデオロギーを全く自由に取得した。どれもが勧誘し増殖し拡大し、大なり小なりの領分を建設したが、すべては全く自由に行われた。種々の形態の代表者が、それぞれ自己の形態のためにいいことをいい、各形態の長所短所はたがい率直にまた辛辣に論議されるが、しかしそれはすべての人びとに自明的と感ぜられていた地盤、すなわちそれに基づいて各形態が他の形態の特殊な機能における相対的な資格を認めることとの共通の問題と共同の任務との地盤に立ってのことである。こうしたことはすべて協同組合的移住地の歴史において独特のものである。それだけではなく、私の見る限りでは、社会主義運動の歴史においても、ここほど、分化の過程のさ中に統合の原則を守ることが慎重に考えられたことは、他のどこにもなかったのである。

このようにして、様々の時代と状況とにおいて成立したところの様々の形態および中間形態

は、種々の社会的構造を示している。そしてその建設に当たった人びとの多くはこのことを、彼らをはげました特殊の社会的および精神的欲求と同じように、知っていた。しかし異なる形態には異なる人間タイプが対応すること、したがってクヴツアの最初の原形態から新しい形態が分れるように、開拓者の最初のタイプから新しいタイプがそれぞれ特殊の存在様式とそこで実現しようとするその熱望とをもって分れたという事実は、同じ程度には知られていなかった。なるほど、経済的およびその他の諸要因からしばしばある人びとが一つの形態を脱して他の形態に加わりはした。だが主として、それぞれの人間タイプが自己の特性の社会的充足をこの特定の形態に求め、多かれ少なかれそれを見出したというのが事実である。そして各形態は、一定の人間タイプに基づいていたばかりでなく、さらにこのタイプをたえずつくり出したし、またたえずつくり出しており、それを発達させることにつとめたし、またつとめている。それぞれ形態の構成、生活形態、教育制度も——どの程度に意識してかはとにかくとして——これを目ざしていた。かくして広い世界でのあらゆる社会的実験とは本質的に異なるものが生れた。それは、各自が自己の問題と計画とをもってそれぞれ自己のために研究する実験室ではなく、共同の土地で様々の方法による様々の栽培が共同の目標に向ってたがいに試されている実験畑なのである。

しかしここでもまたある問題が、しかも個々のグループの内部ではなく、グループ相互の関係のうちに発生した。それは外部からではなくて内部から、しかも自由の原則のまっただ中から起ったのである。

クヴツアは、その最初の未分化な形態においてすでに連合への、より上の社会単位への各クヴツアの結合の傾向をもっていた。これはクヴツアが明示的ではないせよ、暗黙のうちに構造的に更新された社会の細胞と考えられていたことを示す点で、きわめて重要な特徴である。様々の形態、家計や生活秩序や子供の教育に個人的な独立性を保持する半個人主義的形態から、純共産主義的形態にいたる様々の形態の分離や発展とともに、一つの団結に代って一連の諸団結が成立し、それぞれにおいて一定の集落形態と多かれ少かれ一定の人間タイプとが互いに連合を結成し、そのさい各地域的グループが、個々のグループのなかで行われているのと同じ共同性と相互扶助の原則のもとに結合することが基本的前提であった。しかし包括的統一への傾向も決して消滅しなかった。その傾向は、たしかに「キブツ」(Kibbutz)的集団主義的な運動においては、いっそう力強くまたはっきり効果をあげた。またそれは全国キブツ(キブツ連合)すなわち地域的グループがつねに種類と傾向にしたがって結びつけられる団結を、たんに一時の構造として、この運動の著名な代表者の表現によれば、たんに諸コミュニティのコミュニティの代用物として認めようとしている。しかし個々の形態、とくに「モシャヴィム」(Moshavim)すなわち半個人主義的な労働者移住地(だがこれは連帯的経済指導や相互扶助の点で他のいか

なる形態にも劣っていない)が、統一計画のなかに含めることができないほど、すでに基本形態から遠くはなれたことは別としても、キブツ運動自体のうちにおいてもまた、部分組織が、それらをおおいたは吸収しようとする統一傾向を妨げている。各部分集団がその団結のなかで自己の特性をつくりあげかつ強めた。そしてそれぞれが統一を自己の拡大と考えるように傾いたのは当然のことではかない。しかしこれになお、こうした分離的団結の態度をいちじるしく高めたもの、すなわち政治化がつけ加えられる。二十年前にはまだある大きな団体の指導者はこう強調することができた。「われわれは共同体コミュニティであって政党ではない。」これはその後根本的に変わり、そしてそれに応じて統一の条件も本質的にいっそう困難となった。このことからまた、社会の構造的更新にとって基本的に重要な近隣関係が、よし大いに発展した豊かな村が他の団体に属する近隣の貧しい青年にたくさん援助を与えた実例が少くないにしても、十分にうち建てられないという遺憾な事実が生じた。こうした事情の下において、とりわけここ十年の間に統一問題について燃えあがった大きな争は、いっそう注目に値するのである。社会主義的心情をいだく何人も、この争に関する大部の記録、労働指導者故ベルル・カッネルソンが発行した、もっと正確には編集したヘブライ語の編集書、公刊されてはいない『キブツとクヅツア』を読むと、二つの陣営が真の統一のために行った争の高潔な熱情に感嘆せざるをえない。統一はおそらく、それを不可欠とする新しい事態による以外には結成されないであろう。しか

し、ヘブライ共同体村の人々が *communias communitatum* (諸共同体の共同体) 生成のため、すなわち構造的に更新されて社会の生成のため、互いに対抗し、また協力しながら努力してきたことは、人類更新への努力の歴史において忘れられることはないであろう。

私は、ユダヤ人のこの大胆な企ての経過のうちに、模範的な失敗でないものを見るといった。模範的成功といっはなるまい。模範的成功となるためには、なお多くのことがなされなければならぬであろう。だがまさにこのようにして、このようなテンポで、このような後退と幻滅と新たな冒険とをもってこそ、人間の世界に真の変革が達成されるのである。

それではこの失敗でないものをもって模範的であるといえるであろうか。だが私自身そこに導いたものが全く特殊な前提と条件であったことを、指摘しなかつたらうか！ クヅツアの代表者がクヅツアを典型的にパレスチナの産物であるといったことは、とりわけこの形態にあてはまるのである。

だが一定の前提と条件の下での企てがひとたびある程度成功したならば、ひとは他の、それほど好都合でない前提と条件の下でも、その企てを変えて着手することができるのである。

最近の戦争を世界危機への序曲の終りと見ねばならぬことにはもはやほとんど疑問の余地はありえない。世界危機の爆発は——長くつづきえない陰うつな「中休み」の後——多分二三のより小さい国に始まり、それら国々はその混乱した経済をただみかけだけしか再建しえないで

あろう。それらはただちに根本的な社会化の必要、とりわけ土地収用の必要に直面するであろう。そのとき、誰が変革された経済の眞の主体となり、社会的生産手段の持主となるか、最高度に中央集権化された国家の中央権力か、それとも共同に生活し共同に生産する農村および都市の労働者とその代表団体との社会単位か、これが全く決定的に重要となるであろう。この後者の場合には改造された国家機関はただ調整と管理の機能を営むだけになるであろう。より大きな国でも後でしだいにこれにならうであろう。この決定にこそ、新しい社会と新しい文化との生成が広くかかっている。次の原則についての決定が問題なのである。すなわち諸連合の連合としての社会の構造的更新と国家の統一機能への縮少か、それとも全能国家による無定形社会の吸収か、社会主義的多元主義か、それとも「社会主義的」中央集権主義か、変化する条件によって日々新たに吟味される集団的自由と全体秩序との正しい釣合か、それともいわゆる「ひとりでに」やってくる自由の領域のために不定期間強いられる絶対的秩序か。ロシアが自ら本質的な内部の変革を経ない間は——そしてわれわれはいまなおそれがいつまたどのようになるかを知りえないのである——その時選択すべき社会主義の二つの極の一つをわれわれはモスクワという強力な名で示さなければならぬ。もう一つの極を私はあえて「エルサレム」と名づけるものである。